

# ニクソンと毛沢東の 現実主義

大嶽秀夫  
〔同志社女子大学教授〕

Hideo Otake

1943年生まれ。京都大学法学部卒。東京大学大学院博士課程修了。東北大学教授、京都大学大学院法学研究科教授などを経て現職。専攻は日本政治、政治過程論。著書に、『現代日本の政治権力経済権力』（三一書房、サントリー学芸賞）、『20世紀アメリカン・システムとジェンダー秩序』（岩波書店）など。

## はじめに

国際経済については日本人も、それが熾烈な競争の場であり、各国が自らの利益を追求する中で諸外国との厳しい交渉、場合によっては不意打ちや抜け駆けなど、油断のならない世界であることを認識するに至っている。ところが国際政治の場では、今なお、平和主義、モラリズムが蔓延し、「信頼」や「協調」といった言葉が頻繁に

語られる。さもなくば善悪二元論（というやほりモラリズム）に立つた排外主義が幅をきかせている。国際政治は人々が考える以上に複雑な世界であり、各国の利害が錯綜し、完全な善というものもないし、完全な悪というものも存在しない。そして外交交渉は、笑顔を交わしながらテーブルの下で足をけり合う場所である。それを冷徹に見、その中で国益の追求と国際秩序の安定を求めるのが、現実主義外交というものである。

本稿で、数十年も前のニクソン・キッシンジャーと毛

沢東、周恩来が繰り広げた米中接近を再検討したのは、彼らが実践した現実主義外交という姿勢こそ、現在の日本が複雑で厳しい国際環境に立ち向かうのに不可欠であるとの筆者の認識からである。現実主義はアメリカや中国でも大衆の理解を得ていたわけではないが、問題は、日本では一般国民やマスメディアはむろん、外交の当事者ですら、こうした思考が欠落していることである。

ニクソン・毛沢東外交に、国際認識の上での誤りがなかったわけではないし、政策上の失敗から免れていたわけでもない。しかし今日においても、彼らの壮大で遠大なヴィジョンとそれを実現するための狡猾とさえ言える戦術から、我々が学ぶものは少なくないと、筆者は考える。以下の論考はそうした意図から読んで頂きたい。

さてニクソンによる米中接近、米中和解は、世界のパワー・バランスに革命的とも言える変化をもたらした。共同する二大敵国に直面する事態から米国（と中国）を解放し、ソ連にその悪夢を押しつけたことよって、である〔Kirby, 285〕。実は、ニクソン就任当時、アメリカは最悪の場合、二つの大きな戦争と一つの小さな戦争を同時に戦うことを想定していた（2½戦略）。二つとは

ヨーロッパにおける対ソ戦争と東南アジアもしくは朝鮮半島における対中戦争で、小さな一つは中東などでの戦争を指す。中ソが一丸となつて対米全面戦争を仕掛けてくることに備えるものとされていたのである。実は、2½から1½戦略への方針転換は、中国との接近によって、中国を主たる脅威から取り除くことで実現された〔HKI, 291-2〕。

また地政学的にいつて、アメリカにとつての中国は、ソ連を中国との国境に縛り付け、西ヨーロッパの安全を高めるとともに、トルコ、アフガニスタン、パキスタンなど、ソ連の突破口になりそうな地域に進出させないためという軍事戦略の意味があった〔田久保、二二九-三〇一〕。

さらに対中接近によつてソ連との軍備制限交渉を加速させ、それを梃子に対中接近を加速させることも可能であった。二つの大国を競わせて、いずれの国とも良好な関係を築き上げつつ、である。ただ、対中接近には下手をすれば、対ソ・データントにとつて重大な障害となるリスク、それどころか（ソ連からの激しい反発を招いて）米ソ関係を一転して極めて危険な状態にするリスクがあ